

輪廻転生とカルマの法則

スワミー・メーダサーナンダ



日本ヴェーダーンタ協会

出版者のことば

本書『輪廻転生とカルマの法則』は、日本ヴェーダーンタ協会による日本語が原作となる初めての出版です。これまで協会による日本語の出版物はすべて翻訳によるものでした。

本書は、二〇一五年伊勢での協会恒例の夏期リトリートにて、多くの人々が深い関心を寄せた重要な霊的テーマについて、長時間が費やされた講話と考察がもとになっています。また本書は、生や死、活動、そして最終的にはインド哲学が説く解脱など、人生の重要な問題を扱っています。そして、『輪廻転生とカルマの法則』は、人生のこのような問題に真剣に答えを求めている人々に大いに役立つと、確信しております。

本書の出版は、多くの誠実で勤勉な協力者の、懸命な働きのおかげで実現されました。山本郁美さんが講話を書き起こしました。主な功績は、神への奉仕という精神で完璧をめざして編集の労を執られた田辺美和子さんによるものです。その仕事を熟練翻訳者の村椿笙子さんが支援をされ、佐藤洋子さんが校正をしました。ここに協力者の方々にシュリー・ラーマクリシュナの祝福を願い、深く感謝いたします。

またご多忙の中、本書に序文を寄稿して下さいました著名な人類学者であられる、東京大学の田辺明生教授にも心からお礼を申し上げます。

さらに本書のカバーのデザインは、スパーブラタ・チャンドラ氏によるものです。深く感謝いたします。

本書が人生の真の意味を探求する人々の興味を引き、さらに役立つことができれば、出版者、著者、編集者、その他すべての出版関係者は十分に労が報われ非常に嬉しく思います。

序文

田辺明生

敬愛するスワーム・メーダサーナンダ師のご高著『輪廻転生とカルマの法則』に序文を捧げるありがたい機会を賜り、まことに光榮に存じます。本書はヴェーダーンタ哲学の神髄をわかりやすく明晰に説いているだけでなく、それが現代社会に生きる私たちにとっていかなる重要な意義があるかを大きな説得力をもって伝えてくれます。

自らが死すべき存在であることを思えば、限られた人生においてほんとうの幸せを追求するはずだ、とメーダサーナンダ師は指摘なさいます。たしかにそのとおりです。では、ほんとうの幸せとは何でしょうか、そして、それはいかに得ることができるのでしょうか。本書は、人生においてもっとも重要なこの問いに、はっきりとした答えを与えてくれます。

・この重要な問いは、真理とは何か、という決定的な問題とも関わりません。もし永遠の真理などないとしたら、もし死ねばすべてが終わるのなら、私たちはそれほど深く考える必要はないでしょう。生きているあいだけ、ただこの肉体の快楽を追求して暮らせばよいということになるからです。来たるべき死について考えるということは、この「私」とは何か、について考えぬくことです。

・「私」とは、単にこの肉体のことなのでしょうか。そうではない、とメーダサーナンダ師はおっ

しゃいます。死によってなくなるものは、私たちの肉体にすぎません。しかし、肉体がなくなっても、自己存在のエッセンスは残ります。それが「魂」です。

死のさいに魂は肉体を離れますが、そのときに、それまで自己が為してきた行為の積み重ね（カルマ）とそれがつくりだしてきた自己の傾向性（サムスカーラ）もいっしょに運びます。それで生まれかわったときに人間は、特定の能力や性格を前世からひきついでもっているのです。それらは自らの行為の結果に他なりません。行為は必ず結果を生みますが、その結果を経験するために、人間はまた生まれかわるのです。カルマが残っている限り、私たちは何度でも生まれかわらざるを得ません。これが輪廻転生です。

重要なことは、メーダサーナンダ師がおっしゃるとおり、このカルマの法則は宿命論ではない、ということ。人間は誰しも特定の状況——ある国、時代、家庭など——のなかに、特定の性質——ある身体、知能、体力など——をもって生まれてきます。自分がいつどこにどのような性質をもって生まれるかをその時点で選ぶことはできません。しかしその与えられた状況をどのように受けとめ、どのように行為してゆくかは自分で選べます。そして自らの行為を通じて自己向上を果たすことができます。自らの将来は自分で変えられるのです。そこに人間の自由への可能性があります。

そして究極の自由とは、自己自身つまり魂を知ることです。私たち自身の本性であるこの魂つまりアートマンこそが、永遠で不変の実在であり、真理そのものなのです。そして魂の本性は、

サチダーナンダー——完全な存在、完全な意識、完全な至福です。私たちの究極の幸せ、究極の自由は、この完全なる魂を知ることには他なりません。それが悟りです。

では、自己の本源たる魂を知って、悟りに至るためにはどうすればよいのでしょうか。その方法として、メーダサーナンダ師は、ギャーナ・ヨーガの実践、欲望のコントロール、すべての願いを神様に向けるという三つを説いてくださっています。そしてこれらの方法がいかに私たちが永遠の実在へと導いてくれるのかをきわめて論理的かつ明快に示してくださっています。これはほんとうの幸せへと私たちを導いてくれる実践的哲学です。

こう書いていて、私の心に大いなるよろこびが満ちあふれてくるのを感じます。それは、このすばらしい本を読み、その内容について思いをめぐらすその経験自体が、私たちの心を永遠で完全なる存在へと向けてくれるからでしょう。どうかひとりでも多くの読者諸賢が、メーダサーナンダ師の聖なるお言葉に触発され、自らの生を省み、自らの生を変えてゆくための一歩を踏み出していただくと思いますように。本書を通じて、より多くの方がほんとうの幸せについて考え、それを探求していただきますように。

二〇一七年　グループニマの近づくときに

東京にて

目次

出版者のことは

序文 田辺明生

序章 世界でもっとも特別な不思議

第一章 よく死ぬ

第二章 死んだらすべてが終わるのか、それとも何かが続くのか

第三章 死とはなにか

13
24
35
51

第四章	三つのからだと魂……………	62
第五章	どのように死ぬのか、死後どうなるか……………	79
第六章	天国と地獄はあるのか……………	98
第七章	カルマとサムスカーラ……………	112
第八章	カルマの法則と輪廻転生……………	121
第九章	輪廻転生をとめる……………	136
用語解説	……………	6
引用文と備考	……………	1

凡例

*は用語解説にある文字です。

序章 世界でもっとも特別な不思議

死の湖とツル

インドに昔、バーラタという王朝がありました。

その子孫でバーンダヴァ（バーンドゥ家の子たち）と呼ばれた五人の王子たちはみな賢く、とても勇敢でした。

兄弟そろってドラウパディーという王女をめぐりましたが（五人の夫に一人の妻というのは当時は珍しいことではありませんでした）、やがて策略によって追放され、森での隠とん生活を余儀なくされていました。

ある日のこと。彼らとドラウパディーは長い時間森をさまよい、とてものが渴いてきました。そこで末弟のサハデーヴァが水源を探しに出かけましたが、しばらくしても帰ってきません。心配になってつぎにすぐ上の兄ナクラが出かけました。ですがナクラも行ったまま帰ってきません。

その上の兄アルジュナも、ビーマも、次々に出かけては戻ってきませんでした。

ついに長男のユディシュティラが、ドラウパディーを残して探しに行く決心をしました。

弟たちが行った道を進むと、やがてきれいな水を満々とたたえた美しい湖にたどり着きました。しかしあろうことか、そのほとりでは、弟たちが息絶え倒れているではありませんか！

ユディシュティラは悲しみにむせびました。

するとふいに頭上から声がしました。

不思議に思っで見上げると、驚いたことにツルが人間の言葉でこう話しかけてきたのです。

「私はこの湖の持ち主である。私はおまえの弟たちに、許可なく水を持ち去るな、勝手にふれたらたちまち死ぬぞ、と警告した。だがたかが鳥の言葉と思ったか、誰も真剣に聞くことはなかった。そしてみな死んでしまった。ユディシュティラよ、おまえも水が欲しいなら、勝手に持っていてはならぬ。まずは私の質問に答えてみよ」

ダルマの神様の質問

これはインドの有名な叙事詩、マハーバーラタの^{*}一節です。

ツルのほんとうの姿はダルマの神様でした。

ダルマの神様は、ユディシュティラにおごりやうぬぼれがないか、清らかで賢い者かどうか、それをテストするためにツルとなって現れたのです。

武勇に優れた弟たちがみな死んでしまうとは、ユディシュティラはきつとこのツルはただのツルではない、と考えました。

そして、

「あなたの許可なくあなたの水を持ち去ることはいたしません。私に質問を与えてください。知るかぎりを尽くしてお答えします」と言いました。

尊敬を持って、おごりなく、誠意をもって答えようとしたのです。

ツルの質問は高い知識を必要とし、数は百ほどもありました。

しかしユディシユティラはそのすべてに、神様がとても喜びたいへん満足する内容で答え、そしてついに兄弟全員が生き返るという恩寵を得ました。

インドの叙事詩は人に霊的な気づきを与えるために生まれたものです。

これは単なる物語でも、問答でもありません。

それはどのようなものだったのでしょうか――。

霊的な問答集

(Q) 最強の敵はだれ？

(A) 怒りです。怒りは強烈なインパクトで私たちを圧倒します。それは良心を忘れさせ、正しい判断力を失わせ、本人さえ思ってもよらないような結果をもたらします。

(Q) もっとも治療のむずかしい病いは？

(A) 強欲です。これに効く薬はなかなか見つかりません。

(Q) もっとも賢い人は？

(A) ダルマ (dharma) を知っている人です。ダルマとは、古代インドのサンスクリット語*の言葉で語源を dhri (やさえる) に持ち、存在をささえるもの、根拠、規範、正しい教え、道徳などといった意味があります。学問や知識に優れている人がもっとも賢い人なのではありません。ダルマとは何かを知り、それを実践して体得した人こそ、もっとも賢い人なのです。

(Q) 最大のおろか者は？

(A) 神様を信じない人、すなわち真理を信じていない人です。真理とは、永遠で無限の存在・意識・幸福で、真理と神様は同じものです。言葉の表現が異なるだけの違いです。

(Q) 人生のもっとも正しい道とは？

(A) 偉大な賢者が歩いた道。それが人生のもっとも正しい道、もっとも安全な道です。聖典も道を照らしますが、それだけを頼りに進むのはたいへん難しいことです。聖典も必要ですが、す

でに目的に達した賢者たちの道を私たちも進んでいけば、それがいちばん正しく、安全な道となるのではないでしょうか。

(Q) もっとも速いものは？

(A) (科学の世界では光ですが、) 心です。心に思えば私たちはすぐその場所に行けます。光も心もインドの哲学では物質です。

(Q) 数えきれないほど多いものとは？

(A) 自然界では雑草、しかし雑草よりも多いのが、思い、考えです。私たちは起きているあいだ、始終つぎつぎに何かを考えています。寝ているときさえ、夢の中で考えています。

世界でもっとも特別な不思議

ダルマの神様とユディシュティラとの問答の中で、もっとも有名で、またこの本のテーマに直結するのがつぎの問答です。

(Q) 世界でもっとも特別な不思議は？

(A) 答えはマハーバーラタ原典のサンスクリット語の読みで紹介しましょう。

アハニアハニ ブータニ ガッチャンティ ヤマモンディラン

シェーシャー ステラッタムミッチャンティ キンマーシチャーリヤムマタハッパラン「1」

意味は、

・アハニアハニ「いつもいつも」

・ブータニ「生きもの」

・ガッチャンティ「行きます」

——どこに？

・ヤマモンディラン「死神ヤマの場所に」——死んでいくという意味です。

・シェーシャー ステラッタムミッチャンティ「生き残っている人は、自分たちは死なないと考えている」

・キンマーシチャーリヤムマタハッパラン「これが一番特別な不思議です」

自分は死なない、この世界は永遠につづく

私たちは、人の命は容赦なく奪われていくものだと思っています。

ニュースや新聞は毎日人の死を報道しますし、事故、天災、病気は残念ですが日常のものです。

望まないにせよ、家族、友人の訃報に接することもあります。

そしてお葬式や火葬場では命のはかなさを痛感しても、日常生活にもどれば、「まさか自分があのと同じ、死ぬという体験をするなんて！」と思っているのです。

命のはかなさを真剣に考えていたのはつかの間の幻のようです。

人生は死に向かって行進しているというのに、誕生日がくるとそれを祝って友人とパーティーをしています。

これはなんとという不思議でしょうか！

私たちにはこの世界や毎日の生活が永遠につづくように思っています。

しかし自分も、この生活も、この世界も、けっして永遠なものではありません。

このことを真剣に考えれば、人生に与えられた時間についても真剣に考えるはずで

それが生き方にポジティブな影響を与え、人生がより有意義になるはずで

ほんとうの幸せについてつねに考え、それを追求するために生きるはずで

よく生き、よく死ぬ——両方合わせてが人生

人は生まれたからには絶対に死にます。

ですからこの人生は限られている、という気づきはとても重要です。

この本は死をとりあげたものではありませんが、けっして否定的でも、悲観的でもありません。全体的、包括的、ホリスティックで前向きなものです。

なぜなら人の人生とは誕生、成長、衰え、死からなる一連であり、その一部分が「生」、もう一部分が「死」だからです。

そして人生が「生」と「死」の合わさったものなら、私たちは「生」の部分もよく生きなければならぬし、「死」の部分もよく死ななければなりません。

しかし残念ですがほとんどの人は、「よく生きる」には興味がありますが「よく死ぬ」をあまり考えようとはしません。

むしろ怖い、避けたい、考えたくないと思っています。

ですが両方合わせてが人生、どちらが欠けても満足した人生にはなりません。

ならば死ぬだけではなく、生きるだけではなく、両方合わせて満足した人生を生きようではありませんか！

哲学が神秘を明かす

しかしながら、死はたいへんな神秘です。

死についてたずねても誰にも答えようがないですし、それについて話すチャンスも聞くチャン

スもありません。

死の神秘を学ぶ機会はそれほどまれです。

それは、誰にも経験がないからということだけでなく、人間と、人間にまつわるものごとについてを徹底的に検証する必要があることだからです。

そしてその知識は受け取る準備がととのっていない人に与えられると、理解できないだけではなく、誤って理解する可能性があります。

だから昔は特別な人だけがそのことを理解していました。

人里離れた森の中で、限られた、特別な聖者たちだけがそれについて話し、議論し、熟考し、瞑想し、理解していたのです。

しかしスワミー・ヴィヴェーカーナンダ*がそれを解放しました。

「真理はみなのお知識である。森のほら穴に住む聖者たちだけのものではない。真理こそ世界の人びとに広めるべきものだ」と言って、その知識を現代社会でも実践できるような道をひらいたのです。

それがヴェーダーンタ哲学*です。

ヴェーダーンタ哲学はインドの聖典ヴェーダ*のウパニシャド*を基礎として、人が究極の幸せ、すなわち真理にいたる道を示します。

それを論理的、合理的、系統的に説明します。

それだけではなく知識を実践に生かそうとします。

ヴィヴェーカーナンダが眼目においたのも実践的哲学ということでした。

この本においても、死の神秘をテーマとしてあつかいながら、真理にいたるための知識と実践方法を分かち合うことを、目的としていきます。